様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００４３３

研究課題名（和文）ポストモダンの時代に書かれたバイオフィクションにおけるモダニスト作家の表象研究

研究課題名（英文）Representation of Modernist Writers in Postmodern Biofiction

研究代表者
星　久美子（Hoshi, Kumiko）

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０５７２１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「バイオフィクション」とは何かという学術的「問い」への解を示すことを目的とし、とくにポストモダンの時代に書かれたモダニスト作家が対象となっている作品における特徴を明らかにすることを目指した。本研究の結果、「バイオフィクション」とは、主人公が実在する歴史上の人物である点は「伝記」と同じだが、フィクションを含むという点以外にも重要な相違点があることが明らかとなった。また、「バイオフィクション」の起源は19 世紀後半まで遡り、さらに、ポストモダンのバイオフィクションで、モダニスト作家が対象となっている作品では、その作家の小説技法や特徴の再現が試みられている場合が多いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、「メタバイオグラフィー」とは何かという学術的「問い」を探求する一連の研究の集大成であり、新たに「バイオフィクション」という変種を加えることで、体系的な研究となったことは学術的にも意義があると考えられる。また、本研究は、主にモダニズムの時代から現在に至るまでに英語で書かれた、新しい伝記作品を中心に考察してきたが、文学ジャンルという枠を超え、「ライフ・ライティング」というより大きな学際的な枠組みで捉え、その諸相を明らかにすることで、昨今、急速に発達しているSNSなどにおける他者について語る行為についても理解を深める研究となり、その意味で社会的意義があるのではないかと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study explored what ‘biofiction’, is, and how and when it developed, consequently aiming to complete a series of studies on ‘metabiography’, a new type of biography emerging from the early twentieth-century modernist ‘New Biography’. Through this study, it has been made clear that ‘biofiction’ is a literature in which a protagonist is named after an actual historical figure’, and that it is different from biography in many ways. Not only does ‘biofiction’ include more or less elements of fiction, but that the authors of ‘biofiction’ aim to create their own vision of the world by using the subject’s life while the biographers attempt to represent the subject’s life as it was. This study also revealed that the origin of ‘biofiction’ dates back to the late nineteenth century, and that postmodern biofiction featuring modernist writers showed its author's attempt to reproduce the modernist writer's literary and narrative techniques as well as representing his/her life.

研究分野：英文学

キーワード：バイオフィクション　バイオグラフィー　メタバイオグラフィー　ライフ・ライティング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究のそもそもの着想は、平成 21 年に東京女子大学に提出した博士論文“D. H. Lawrence's Representations of Relativity: With Special Reference to the Cultural Climate of Modernity Before Einstein”（Ｄ・Ｈ・ロレンスによる相対性の表象：アインシュタイン以前のモダニティーの文化的風土において）を執筆する過程で得られた。

(1) 科学史におけるアインシュタインの位置づけを調べる際に読んだ科学者の伝記作品（たとえば、後述するパトリシア・ファラ(Patricia Fara)の『ニュートン伝』(*Newton: The Making of Genius* 2002)）が従来の伝統的な伝記とはまったく異なり、いわば「伝記についての伝記」という意味で「メタバイオグラフィー」と呼びうるのではないか。

(2) ロレンス研究を進める中で読んだ A・J・A・シモンズ(A. J. A. Symons)の『コルヴォーを求めて』(*The Quest for Corvo* 1934)は、伝統的な伝記とも、「伝記についての伝記」とも異なっていたが、「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」という意味で「メタバイオグラフィー」に分類できるのではないか。後者については、ジュリアン・バーンズ(Julian Barnes)の『フロベールの鸚鵡』(*Flaubert's Parrot* 1984)や A・S・バイアット(A. S. Byatt)の『抱擁』(*Possession* 1990)などのポストモダン小説にも同じ傾向が見られることから、「メタバイオグラフィー」から「メタバイオグラフィカル・フィクション」へと発展しているのではないかと考えた。

以上の着想に基づき、平成 26 年度に科学研究助成事業（科研費）「挑戦的萌芽研究」として採択された「『メタバイオグラフィー』の学際的研究を通したモダニズム・ポストモダニズム再考」という研究題目では、以下の研究成果が得られた。

(1) 文学史の中でバイオグラフィーの系譜を辿り、「メタバイオグラフィー」の誕生が 20 世紀初頭、とくにリットン・ストレイチー(Lytton Strachey)やヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)などが活躍したモダニズムの時期であることを論証した。

(2) 「メタバイオグラフィー」の特徴を明らかにし、「伝記についての伝記」と「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」の二種類があることを明らかにした。

(3) 二種類の「メタバイオグラフィー」のうち、「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記」に該当する作品として、ジェフ・ダイヤー(Geoff Dyer)の『怒りに任せて―D・H・ロレンスとの格闘』(*Out of Sheer Rage: Wrestling with D. H. Lawrence* 1997) を考察し、その特徴―すなわち、「ジャンル曖昧性」、「ファクトとフィクションの融合」、「自己言及性や間テクスト性」、および「伝記作家の主体性」―を明らかにした。

これらの研究成果に基づき、「メタバイオグラフィー」研究を以下の点でさらに発展させる可能性があるのではないかと考えた。

(1) モダニズムの時代に書かれた伝記には「メタバイオグラフィー」の特徴を示すものが多い。リットン・ストレイチーやハロルド・ニコルソン(Harold Nicolson)による伝記などが該当する。

(2) モダニズムの時代に書かれた小説には、「メタバイオグラフィー」を発展させた「メタバイオグラフィカル・フィクション」と称されうる作品が多い。ヴァージニア・ウルフの『オーランドー』(*Orlando* 1928)や『フラッシュ』(*Flush* 1933)などが挙げられる。

(3) モダニズム作品がポストモダンの時代に書かれた「メタバイオグラフィー」および「メタバイオグラフィカル・フィクション」に影響を与えた可能性が大きい。

(4) 「メタバイオグラフィー」および「メタバイオグラフィカル・フィクション」は「ライフ・ライティング」という、学際的で、分野横断的な研究分野で考察することで、文学研究における新たな視点をもたらすのではないか。

「ライフ・ライティング」は、近年、新しい学際的研究領域として注目されてきている。国外、とくに、Centre for Life-Writing Research (King's College London) (英国) や Oxford Centre for Life-Writing（英国）などが中心となって学会開催や情報発信を積極的に行っている。

「メタバイオグラフィー」は、『オックスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*, or *OED*)の最新版(2009)や『ライフ・ライティング辞典』(*Encyclopedia of Life Writing* 2001)にも記載がない新しい用語である。この用語は、2003 年 11 月 21 日号の『タイムズ文芸付録』(*Times Literary Supplement*)に掲載されているパトリシア・ファラの『ニュートン伝』に関する書評でこの伝記を「メタバイオグラフィー」と称しているのを皮切りに、2004 年に創刊された学術誌『ライフ・ライティング』(*Life Writing*)の「編集記」(Editorial)では「『メタバイオグラフィー』と呼ばれる新しいカテゴリーの誕生」を宣言している。2005 年に出版されたニコラス・A・ルプケ(Nicolaas A. Rupke)の『フンボルト伝』(*Alexander von Humboldt: A Metabiography*)が「メタバイオグラフィー」という副題を有し、同年に出版された *Self-Reflexivity in Literature* に“Fictional Metabiographies and Metaautobiographies: Towards a Definition, Typology and Analysis of Self-Reflexive Hybrid Metagenres”と題された論文が収録されている。

「メタバイオグラフィカル・フィクション」および「バイオグラフィカル・フィクション」も

新しい文学ジャンルであり、国外では「バイオフィクション」と称されるジャンルの一部として議論されることが多い。たとえば、ミネソタ大学（米国）のマイケル・ラッキー(Michael Lackey)は 2015 年に「バイオフィクション」をテーマにしたメーリングリストを開設し、MLA 年次総会においても「バイオフィクション」に関するセッションを計画するなど、活発な研究活動を始めている。

以上のように、「ライフ・ライティング」、「メタバイオグラフィー」、「メタバイオグラフィカル・フィクション」、および「バイオフィクション」の研究は、国外においては最先端の研究であり、国内ではまだ十分に行われていないことから、新しい伝記のあり方について、縦断的・横断的に研究する本研究の意義は大きいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、平成 26 年度から科学研究助成事業（科研費）の助成を受けて始められた「メタバイオグラフィー」とはなにかという学術的「問い」を探求する一連の研究の集大成を目指すものであり、新たに「バイオフィクション」とはなにかという学術的「問い」への解を示すことを目的とした。近年、「バイオフィクション」は、新たな文学ジャンルとして注目され、数多くの作品が出版されており、それらの作品について、主に国外で盛んに議論されている。本研究は、「バイオフィクション」の定義を確立した上で、とくにポストモダンの時代に書かれた「バイオフィクション」の中でモダニスト作家が伝記対象となっている作品に着目し、その表象、とくにモダニスト作家の小説の技法や特徴が再現されているのかどうかという点を考察し、モダニズムからポストモダニズムへの連関性を明らかにする試みであった。最終的には、伝統的なバイオグラフィーから、モダニズムの時代に誕生した「メタバイオグラフィー」を経て、ポストモダンの「バイオフィクション」へと連なる「ライフ・ライティング」の系譜を示すことを目指した。

一連の研究の全体像は以下のとおりである。

(1) 伝統的なバイオグラフィーの系譜
(2) 「メタバイオグラフィー」誕生前夜
　① リットン・ストレイチーの『ヴィクトリア朝偉人伝』(1918)
　② ハロルド・ニコルソンの『ある人々』(1927)
(3) 「メタバイオグラフィー」誕生
　① ヴァージニア・ウルフの『オーランドー』(1928)と『フラッシュ』(1933)
　② A・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』(1934)
(4) ポストモダンの「メタバイオグラフィー」:「伝記を書いていく過程を明らかにする伝記
　　—ジェフ・ダイヤーの『怒りに任せて：D・H・ロレンスとの格闘』(1997)
(5) メタバイオグラフィー」から「メタバイオグラフィカル・フィクション」へ
　① ジュリアン・バーンズの『フロベールの鸚鵡』(1984)
　② A・S・バイアットの『抱擁』(1990)と『伝記作家の物語』(2000)
　③ ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』(1994)
(6)「バイオフィクション」とはなにか
(7)「バイオフィクション」におけるモダニストの表象
(8) もうひとつの「メタバイオグラフィー」:「伝記についての伝記」
　　—ニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』(2008)

上記リストの中で、1~5、および 8 についてはこれまでの一連の研究で考察しており、今回の研究課題では、6 および 7、すなわち「バイオフィクション」とはなにかという学術的「問い」を探求することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、以下の方法で遂行された。

(1)文献資料・情報の収集および分析

本研究の着想を得てから文献資料は収集しているが、「ライフ・ライティング」、「メタバイオグラフィー」、「メタバイオグラフィカル・フィクション」、および「バイオフィクション」に関しては、毎年、新しい文献が出版されるため、文献資料・情報の収集を行った。夏期休暇には、オックスフォード大学附属図書館(英国)において、研究テーマに関連する文献資料・情報の収集を集中的に行った。さらに、令和 4 年度は、レディング大学（英国）において在外研究を行ったが、その際にも文献資料・情報の収集を行った。このように収集した文献資料・情報は、分析の上、一回の国際学会(London Centre for Interdisciplinary Research 主催 Memory Studies Summer School)および二回の国内学会（第 54 回日本ロレンス協会全国大会、日本英文学会中部支部第 75 回大会シンポジウム）での口頭発表、一本の論文「メタバイオグラフィーの二類型--A・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』とニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』」に反映されているとともに、現在準備中で、Cambridge Scholars Publishing（英国）から出版される予定の単著(*Quests for Corvo: Development and Variation of Metabiography from Modernism to the Present*)（仮題）にも反映されている。

(2)国内・国際学会での口頭発表の原稿執筆および視覚資料の準備、口頭発表、出席者との意見交換

収集した文献資料および情報を元に、一回の国際学会(London Centre for Interdisciplinary Research 主催 Memory Studies Summer School)および二回の国内学会（第 54 回日本ロレンス協会全国大会、日本英文学会中部支部第 75 回大会シンポジウム）で口頭発表を行うため、原稿を英語および日本語で執筆し、パワーポイントによる視覚資料を作成した。口頭発表を行い、それに引き続き行われた出席者との意見交換を通して、さらなる知見を得ることができた。

(3)論文の執筆

平成 26 年に採択された科研費採択課題の研究成果であった日本英文学会第 86 回全国大会における口頭発表の原稿を元に、今回の採択課題の研究で得た新たな知見を加え大幅に改訂し、「メタバイオグラフィーの二類型--A・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』とニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』」と題し、『愛知学院大学文学部紀要』（第 49 号）に投稿、掲載された。

４．研究成果

各年度の研究成果は以下のとおりである。

(1) 令和元年度

① 「メタバイオグラフィー」の定義をまとめて、論文「メタバイオグラフィーの二類型--A・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』とニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』」として執筆し、発表した。また、「バイオフィクション」とはなにかという定義の確立を目指し、ポストモダンの時代に書かれた「バイオフィクション」の中からモダニスト作家が伝記対象となっている作品を読み、モダニスト作家の小説の技法や特徴が再現されているかという観点から検証を行った。

② 夏期休暇中には London Centre for Interdisciplinary Research 主催 Memory Studies Summer School に参加し、モダニズムにおける重要な主題のひとつである「記憶」の問題について知見を深め、この観点からW・G・ゼーバルト(W. G. Sebald)の『移民たち』(*The Emigrant* 2005)を考察した。この研究から、「ライフ・ライティング」における「記憶」の表象という新たな着眼点が得られた。

(2) 令和 2 年度

令和 2 年度は、世界的な新型コロナウイルス感染拡大のため、国際学会も延期され、海外への渡航もできなかったが、近年、新しく出版された「バイオフィクション」、とくにモダニスト作家が扱われている「バイオフィクション」を読み進めた。

(3) 令和 3 年度

令和 3 年度は、令和 2 年に引き続き、モダニスト作家が扱われている「バイオフィクション」を読み進め、考察を始めた。

(4) 令和 4 年度

① 令和 4 年度は、イギリスにおいて在外研究を行い、本研究を英語の単著として出版すべく準備を進め、英国の出版社にプロポーザルを提出し、受理された。

② ポストモダンの時代に書かれた「バイオフィクション」の中でモダニスト作家が伝記対象となっている作品に着目し、その表象、とくにモダニスト作家の小説の技法や特徴が再現されているのかどうかという点を考察した。とくに、ヘレン・ダンモアの『暗闇のゼナー』(1993)、これは第一次世界大戦中にイギリスのゼナーに滞在していた D・H・ロレンスをめぐる物語であるが、この作品においてロレンスの伝記的事実がどのように使われているか、ロレンス作品にどのように言及されているか、さらにロレンスの小説技法のひとつであるシンボルの使い方について類似点があるかどうかという観点から考察した。

(5) 令和 5 年度

① 令和 5 年 6 月 17 日(土)に高知県立大学で行われた日本ロレンス協会第 54 回大会において、令和 4 年度に進めたヘレン・ダンモアの『暗闇のゼナー』(1993)に関する研究発表を行った。

② 令和 5 年 10 月 28 日（土）に岐阜市立女子短期大学で行われた日本英文学会中部支部第 75 回大会において、「ポストモダンの時代にヴィクトリア朝をアダプトする―ディケンズ・ブロンテ・ワイルド―」と題するイギリス部門のシンポジウムを主催し、「オスカー・ワイルドとバイオフィクション」と題する個人発表を行った。この研究により、「バイオフィクション」とは、主人公が実在する歴史上の人物である点は「伝記」と同じだが、フィクションを含むという点以外にも重要な相違点があることが明らかとなった。すなわち、「バイオフィクション」は伝記対象の人生を利用して、著者の世界観を創造するのに対し、「伝記」は伝記対象の人生を表すというこ

とである。また、これまで「バイオフィクション」の誕生は20世紀初頭のモダニズムの時代であると想定していたが、19世紀後半に書かれたワイルドの「W・H氏の肖像」(‘The Portrait of Mr. W. H.’1889)の影響も看過できないという発見があり、本研究を見直すきっかけとなった。

今後の予定としては、平成26年度から科学研究助成事業（科研費）の助成を受けて始まった研究の成果を英語の単著としてまとめ、Cambridge Scholars Publishingから出版する予定である。Cambridge Scholars Publishingに提出したプロポーザルの内容は以下のとおりである。

書名（仮）

Quests for *Corvo*: Development and Variation of Metabiography from Modernism to the Present

目次（仮）

Introduction	Two Types of Metabiography: A Biography about Biographies and a Biography after Traditional Biography
	--Nicolaas A. Rupke, *Alexander von Humboldt: A Metabiography* (2005)
Chapter 1	The Origin of Metabiography: Modernist 'New Biography'
	--Lytton Strachey’s *Eminent Victorians* (1918)
	--Harold Nicolson’s *Some People* (1927)
	--Virginia Woolf’s *Orlando* (1928) and *Flush* (1933)
	--A. J. A. Symons’s *The Quest for Corvo: An Experiment in Biography* (1934)
Chapter 2	Postmodern Quests for *Corvo* (1): Metabiography
	--Jean Gattégno, *Lewis Carroll: Fragments of a Looking-Glass from Alice to Zero* (1974); *Lewis Carroll: une vie*
	--Andrew Field’s *Nabokov: His Life in Part* (1977)
	--Ian Hamilton, *In Search of J. D. Salinger* (1988)
	--Eunice Lipton, *Alias Olympia: A Woman’s Search for Manet’s Notorious Model & Her Own Desire* (1992)
	--W. G. Sebald’s *The Emigrants* (1996)
	--Hermione Lee, *Virginia Woolf.* (1997)
	--Geoff Dyer’s *Out of Sheer Rage: Wrestling with D. H. Lawrence* (1997)
	--Richard Holmes’s *Footsteps: Adventures of a Romantic Biographer* (1985) and *Sidetracks: Explorations of a Romantic Biographer* (2000)
	--Jonathan Coe’s recent biography of B. S. Johnson *Like a Fiery Elephant: The Story of B. S. Johnson* (2005)
Chapter 3	Postmodern Quests for *Corvo* (2): Fictional Metabiography / Metabiographical Fiction
	--Henry James’s *The Aspern Papers* (1888)
	--Julian Barnes’s *Flaubert’s Parrot* (1984)
	--A. S. Byatt’s *Possession* (1990) and *The Biographer’s Tale* (2000)
	--Janice Kulyk Keefer’s *Thieves* (2003)
	--Vassilis Vassilikos, *The Few Things I Know about Glafkos Thrassakis* (2005)
Chapter 4	Further Development: Biofiction
	(1) Henry James
	--Emma Tennant, *Felony* (2002)
	--David Lodge, *Author, Author* (2004)
	--Colm Toibin, *The Master* (2004)
	(2) Virginia Woolf
	--Michael Cunningham, *The Hours* (1999)
	--David Hare, *The Hours* (2003)
	--Susan Sellers, *Vanessa and Virginia* (2008)
	--Maggie Gee, *Virginia Woolf in Manhattan* (2014)
	(3) D. H. Lawrence--Helen Dunmore, *Zennor in Darkness* (1994)
	(4) Katherine Mansfield--Janice Kulyk Keefer’s *Thieves* (2003)
	(5) James Joyce--Annabel Abbs, *The Joyce Girl* (2016)
Epilogue	Towards Autofiction

今後の展望としては、本研究は他者について語る「伝記」（バイオグラフィー）という文学ジャンルの発展とその変種の研究であったが、自己について語る「自伝」（オートバイオグラフィー）という文学ジャンルについて、同様の発展や変種が見られるのかどうか、本研究の研究成果を応用しながら研究を進めていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 星久美子	４．巻 49
２．論文標題 「メタバイオグラフィー」の二類型ーA・J・A・シモンズ『コルヴォーを求めて』とニコラス・A・ルプケ『アレクサンダー・フォン・フンボルト伝』ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 HOSHI, Kumiko
２．発表標題 “Memories in W. G. Sebald’s The Emigrants”
３．学会等名 Memory Studies Summer School（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 星久美子
２．発表標題 ヘレン・ダンモアの『暗闇のゼナー』をバイオフィクションとして読む
３．学会等名 日本ロレンス協会第54回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 星久美子
２．発表標題 オスカー・ワイルドとバイオフィクション
３．学会等名 日本英文学会中部支部第75回大会シンポジウム
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関